

川端康成の小説の表現

——「決して」を例に——

STYLE IN YASUNARI KAWABATA'S NOVELS

Taking “kesshite” as an Example

陳 連 浚*

Literature is an inexhaustible treasure of examples of the way extraordinary expressions can be woven from ordinary words. Style differs from an author to another. By focusing on the works of one author, we can reveal the special characteristics of his style.

The present paper analyzes the way Yasunari Kawabata uses the expression “kesshite”. Furthermore, it is an inquiry into the style characteristic to Kawabata's works.

The meaning and function of “kesshite” have been up to now tackled by many studies, such as the ones of Tanaka Toshio (1983), Miyazaki Kazuhito (1990) and Kitahara Yasuo (1996). But they are only an analysis of the meaning and function of “kesshite” as a word — they never consider from “kesshite” a point of view that goes beyond the sentence level. I suggest

*CHEN Lien-Chun 東呉大学卒業。同校日本文化研究所修士課程修了。1992年に研究生として広島大学総合科学部に入学。1995年3月に広島大学社会科学研究所博士課程前期修了。1998年4月博士課程後期履修期間満了帰国。現在南台科技大学応用日本語学系専任講師。論文「『かならず』『きっと』『おそらく』『たぶん』について——川端康成の小説を対象として——」「『どうも』『どうやら』『なんとなく』について——川端康成の小説を対象として——」などがある。

that an analysis of “kesshite” within a larger context would be efficient in making clearer its characteristics.

One can find 251 examples of “kesshite” usage in the novels gathered in *Kawabata Yasunari Zenshu* published by Shinchosha. From the point of view of discourse structure, “kesshite” is used in the following following characteristic way :

- 1 “shikashi”, “keredomo”, “ga”, “tokoroga” and other conjunctions are often used to link phrases. In such cases, the use of “kesshite” helps the introduction of complementary information ; it does not continue the previous discourse.
- 2 discourse is marked by “koto”, “kore”, “toki”. In such cases, “kesshite” stops the narrative flow and adds the feelings and judgements of the speaking voice as to what has been previously said.

Through this analysis I hope to point out not only the characteristics of “kesshite”, but some of the stylistic characteristics of Yasunari Kawabata’s novels also.

一、はじめに

言語活動である文学作品は、ふつうの単語の組合せからすぐれた表現を生み出す用例の宝庫である。その表現のありようは、作家によって、さまざまであって、決して一様ではない。一人の作家の作品に絞って検討していくことによって、その作家の個人的な表現の特徴が見えてくると考えられる。

今回の発表では、川端康成の小説を例にして、「決して」ということばの用い方を考察する。そして、川端康成の小説の表現の特徴について、考えてみたい。

「決して」ということばの、単語としての意味特徴と機能についての分析は、すでに多くの研究者によって取り上げられた。例えば、田中敏生は「否定述

語・不確実述語の作用面と対象面」(1983)で、

この本は 決して 面白くない。

などの例文を取り上げ、「決して」について、

「決して」は、「この本」を「面白い」と呼ぶことは斥けられなければならないということの、その絶対性を表しているとして解釈されるのである。これ即ち、「決して」が否定の作用面ではたらいっているということにほかなるまい。そしてそのことで、文のありかたそのものとしては、作用構造が顕勢化されているのである。

と説明している。また、宮崎和人は「判断文における言表態度修飾成分とモダリティの呼応」(1990)の一文で、

彼は {全然／決して} 映画を観ない(だろう)。

などの例文をあげ、

「決して」は、確かに〈否定〉と呼応するが、それだけでは言表事態修飾成分に過ぎないのであって、むしろ、モダリティの一種である〈断定〉と呼応関係を結び、それを限定・修飾することによって、(否定的)判断の成立について話し手が強く確信していることを表現するといったことに、言表態度修飾成分としての働きがあるとみなしなければならない。(中略)「決して」は、言表事態の〈否定〉と呼応するものの、〈伝達のモダリティ〉の層とも呼応し、決意の程度、禁止の強制力といった意味的側面を限定・修飾していると考えられる。

と述べている。これらの分析に対して、北原保雄(1996)は「決して」について、

酒を飲むことの 決して ない 人は、

のような例文をとりあげ、

「決して」や「全然」は、確かに否定の表現と呼応する。しかし、否定概念は主体的なものではなく、客体的なものである。「決して」や「全然」、その否定概念の程度を修飾限定するものである。

と主張し、「決して」を「程度修飾成分」に所属すべきものだと考えている。

このように、これまでの「決して」についての研究は、陳述修飾成分か程度修飾成分かの説が分かれているにもかかわらず、ほとんどその意味と、伴って起こる否定表現の分析に終始し、文あるいは文の流れの中から、「決して」の特徴を考えるものは見当たらないと言える。

文あるいは文脈の構造という観点から語の意味を考えるという研究方法を取っている日本語学者は数少ないとは言えないが、いわゆる陳述の副詞について、まだまだ考える余地がたくさんあるとも思われる。これまで出された研究成果のなかで、例えば「全然」と「全く」との違いについて、とても示唆的なものもあった^①。陳述の副詞が持つ文全体に対する表現主体に態度の表明をする特殊性から、語の意味の解明だけではなく、話し手の態度をも読み取ることができるように思われる。

それから、言語研究の対象として、具体的な言語事実それ自体を対象とすることはその原点だと思うので、本稿においては、その一例として、川端康成の小説を取り上げる。その実態を記述していく。

二、文の流れから見る「決して」の特徴

前に述べたように、単語としての意味・機能だけではなく、文の流れの中から、「決して」の特徴を考えるということは今回の考察の主な目的である。考察の対象とする新潮社刊行の『川端康成全集』（小説類）に「決して」が251例見られる。これらの用例を文脈の構造という視点から考えると、主に次のような特徴を見出すことができるようである。

(a) 文と文との接続において、「しかし」「けれども」「が」などの接続詞が特徴的に用いられている。

まず、この5例を見てみよう。

1 旅人の心にも似よ椎の花 芭蕉

旅人である作者は、ただ彼等を旅情で眺めるに過ぎなくて、その生活に

深く触れて描き出すことは、恐らく力及ばないだらう。

しかし、彼等は決してスキヤ登山に信濃へ来た人ではない。(六『牧歌』180ページ)

- 2 民子は学生時代から、煙草も吸ひ、酒も飲んだ。

しかし、決して度を過して酔ふことはなく、目のなかが明るんで、言葉がなめらかになると、もうどんなにすすめられても、盃を重ねなかつた。
(十三『川のある下町の話』56ページ)

- 3 初枝が礼子に会ふと、なぜあんなに落着いたのか、彼には分らなかつたけれども、とにかく、二人を見ると、そこに自然な愛情の通ふらしいのが感じられた。

けれども、初枝は決して落着いてゐるわけではなかつた。

彼女は正春の接吻を、怒るとか、悲しむとかよりも、とにかくただもう母のところに帰りたいのだつた。(九『女性開眼』142ページ)

- 4 「向うがこだはらないなら、私のこだはるのはまちがつてるわ。婚礼にね、お嫁さんの母親のゐないのは、さびしいものですよ。お妾の子が本妻の子になつてゐることはよくあるでせう。私の女学校のお友だちにもさういふのがあつて、そのお嬢さんの婚礼に生みの母もよばれて来てゐるのを見たことがあるけれど、決して悪い感じはしませんでしたよ。まだ私はお妾なんかゆるせないと思つてゐた年ごろでしたけれど……。」(八『再婚者』45ページ)

- 5 葉子といふ花形の踊子が伝平の友の恋人だつたのだ。だから彼女を取り巻いてゐることは、われわれにとつて——とりわけ、踊りの下手な私にとつて、ダンス・ホールが気やすく感じられることであつたし、事実またいろんな便利があつた。

しかし、伝平の詩は——さうだ、彼は不遇な詩人であつたが、決しておしやべりな詩人ではなかつた。

「君の詩集は——(略)」(三『或る詩風と画風』108ページ)

これらの用例から、一つの特徴が見えてきたと思われる。例えば、例2では、まず一つの「事柄」（民子は学生時代から、煙草も吸ひ、酒も飲んだ）が取り上げられ、それに対して、一つの補足説明のようなもの（度を過ぎて酔ふことはなく、目のなかが明るんで、言葉がなめらかになると、もうどんなにすすめられても、盃を重ねなかつた）が加えられた。その加えられた補足説明のところに、「決して」が用いられている。この場合、話の流れが展開しないまま、先行する文脈に対して説明を加える点が特徴であろう。例2と同じように、例5では、「彼は不遇の詩人ではあった」という描写に続いて、「おしやべりな詩人ではなかつた」という補足説明のようなものが加えられている。そして、この補足説明のところに「決して」が用いられている。ここで、前の例文と合わせて考えると、もう一つの特徴が見逃さないであろう。それは、「しかし」「けれども」「が」のような接続詞があるということである。話の流れをそこで一旦止めて、何かの説明を加える、こんなところに「決して」が用いられてそれを取り立てるといふ点はその特徴であろう。

また、前の例文から、もう一つの特徴も見出すことができるようである。それは、「決して」が使われるところから、なにかの前提になるものが考えられるということである。つまり、「決して」が用いられるその文の前に、当然とっていいほど「前提」となるものが存在するわけである。例えば、例2の場合、「しかし、決して度を過ぎて酔ふことはなく、目のなかが明るんで、言葉がなめらかになると、もうどんなにすすめられても、盃を重ねなかつた」に対して、その前提となる「民子は学生時代から、煙草も吸ひ、酒も飲んだ」の存在が必要ではなからうか。例1、3、4、5のどちらでも同じような特徴を持っている。

次に、川端康成の小説から、次のような特徴も見出すことができるようである。

(b) その文が「こと」「そんなこと」「それ」などといった語を特徴的に持つ。

例えば、次の諸例を見てみよう。

6 二親が死んでから、私は祖父と二人きりで十年近く田舎の家に暮してゐた。祖父は盲目であつた。祖父は何年も同じ場所に長火鉢を前にして、東を向いて坐つてゐた。そして時々首を振り動かしては、南を向いた。顔を北に向けることは決してなかつた。ある時祖父の癖に気がついてから、首を一方にだけ動かしてゐることが、ひどく私は気になつた。(一『日向』24ページ)

7 そして、もうその夜は——そして次の日も、その次の日も、お姉さまは帰つていらつしやらない。

長年月、喧嘩をしたり、仲直りをしたりして、暮し合つた、あたし達の部屋へ戻つていらつしやることは、決してなささうだ。

幾日かの間、なほみは、急に広びろと感じられる部屋のなかで、泣きたいやうな気がした。(二十『花日記』194ページ)

8 船員でさへ金塊を引き揚げたと思つてゐたといふほどの、潜水夫の海底のからくりを、果して父は見ましたでございませうか。ほんたうに金塊を銀行へ預けたものと信じ、三万円を持つて、得得と神戸へ帰つたのではございませんでしたでせうか。そんなことは決してございませぬ。悪党の頭らしく、金をさらつて、真先きに逃げたのでございませう。(六『金塊』154ページ)

9 「しかし、あなたは長く日本にをられたので、アマの悪いところや、またアマのなかでも悪いアマが、特別目につくのぢやないんですか。」

と、須田は言つてみた。西洋の女にくらべたらあれで沢山で、主人はさほど不服ではないのかもしれない。

老人はまたゆつくり首を振つた。

「そんなことはありません。決してそんなことはありません。」

やがて、熊の平の仏法僧の声で、須田と老人の話も跡絶えた。(六『高原』453ページ)

10 日向にうらうらと寝そべつて、とりとめない夢を追ふのが、人間の幸福

であるといふ見方は、確かに存在し得ることではありませうが、またそれが人間の原始の姿の一つにはちがひはありますまいが、私はそのやうな考へをさげすみながらも、おのづからそれにとらへられてゐるやうであります。さういふ私は生活の現実といふものは遂に知らずに過すのでありませうか。なにかを考へてゐるやうにみえても、それは決して考へてゐるのではなく、考へてゐると思ふだけのことなのでありませう。恐らく悲劇といふものもありますまい。(五『父母への手紙』213ページ)

例えば、例6では、祖父の癖についての話しが続いていたなかで、話の流れを一旦止め、先行する叙述と異なること（北を向ける）が取り上げられた。それから、例8では、先行文脈にかかわって、前に述べたことを一つにまとめ、わざわざ「そんなこと」で表現している。「決して」によって、それを取り立て、「ございますまい」という否定的な判断が加えられている。

これと同じで、例9では、相手が述べたことを心に受けて、「そんなこと」でそれをまとめて、「ありません」に「決して」を加えてそれを取り立てる。それから、例10にも似たような傾向が見られる。表現主体が「それ」で前に述べたことをまとめ、「決して」で「考へてゐるのではな」いことを取り立てていると言つていいであろう。

以上の例で、まとめて言うと、またもう一つの特徴を見出すことができるであろう。つまり、先行する話しにかかわって、話の流れを一旦止め、「決して」でその「こと」（あるいは「そんなこと」「それ」）をまとめて取り立て、表現主体の判断や気持ちを加える点が特徴的であるように思われる。

(c) 一つの文のなかで、前件と後件との関係から、「なら」「と」「から」「ても」などとの間に「取り立て」という特徴が認められるようである。

次に、一つの文のなかで、前件と後件との関係から「決して」の役割を考えてみよう。

- 11 別れないことが、しあはせかどうか、正しいかどうか、それは計り知れない未来にしても、とにかく、別れないではゐられただらう。

「人間と人間だから……。」

人間と人間、まして、男と女とが、いつたん結ばれたなら、決して離れないで生きてゆけるはずだ。

俊三も昭男も、清と朝子の父のやうに、戦争で死んだといふやうなわけではない。(十五『東京の人』545ページ)

- 12 (なにか、綾子さんを安心させる法はないかしら。あたしが、あの方へ不幸な体をきらひになるどころか、却つてよけいに親しくしてあげたいと願つてさへゐることを、どうやつてお伝へしたらいいでせう。——でも、あんな方だから、あたしの気持を同情からなら、決して受けて下さらないでせう。——あの方の足が悪いなんてことちつとも知らずにみた時、もう、あたしがどんなにお友達になりたがつてみたか、それを分つていただかなければ……。) (二十『花日記』244ページ)

- 13 「まあ、なにかひどく自己的な考へらしいね。」と私はやはり言はずにゐられなかつた。

「今といふ時が過ぎると、今の愛情が冷えてしまふと、もう決して愛せなくなる、さう思つたんでせう。」

「それは分るよ。」(八『再婚者』57ページ)

- 14 「みち子がどういふ子だが、僕にはどうにもわからないんだよ。」

「あら、どうして……。」

みち子は顔を上げた。

「君は、黙り屋さんだね。相手がものを言はないと、自分からは決してものを言はんぢやないか。」

「あら。さうかしら。そんなことないわ。」(七『夜のさいころ』68ページ)

例えば、例12では、「同情から」という条件が真である場合、「あんな方(つまり綾子さんのこと)が「受けて下さらない」という判断を「決して」で取り立てられていると言っていいであろう。田中敏生が主張している「顕勢化」のように、「決して」は否定的判断を強める働きがあることは否めないであろ

う。前項の事態の成立が条件として、後項の事態がそれにしたがって真になるとの表現主体の「仮定」の気持ちで、「決して」が後項の事態を取り立てることはその一つの特徴と言えるであろう。例11、13、14もこれと同じような特徴が見られる。

次にこのような例文を見てみよう。

15 落雷の危険を感じながら、このやうな令嬢に寄り添つて、目を見合せてゐたら、死ぬほど幸福であらうと、須田は奇怪な思ひにとらへられてゐた。

「でも、この木には、もう何百年も雷が落ちなかつたんですから、決して落ちないと、私は信じてをりますのよ。」

と、令嬢ははつきり言つた。(六『高原』548ページ)

16 室長さんと会つたら恥ずかしいから逃げようかと言つたりしてゐたのである。受けた恩を忘れるやうでは人間ではありませんから決して忘れません。死んだ後でも忘れません。(十『少年』242ページ)

17 それなのに、クリスマスが来ても、そして、たうとう三学期になつてしまつても、その約束は果されない。普段から、きちんときちんと、どんなに小さい約束でもお守りになるお姉さまのことだから、決してそれは忘れたのでも、怠つてゐるのでもない。ほんたうに病気のせゐなのであつた。
(二十『花日記』381ページ)

例15では、前件（「何百年も雷が落ちなかつた」）と後件（「落ちない」）とが「から」で結びつけ、表現主体の判断である後件に「決して」がわざわざ加えられている。ここで、後項の事態（否定的判断）を取り立てるという意図が感じられる。この意図があるということは例16、17にも見出すことができるようである。

それから、次のような例文もある。

18 「失敬ですが、それは卑屈な考へです。初枝さんは、身分や盲目のことなんか、忘れてゐてくれました。お母さん自身の経験から、割り出して、子供を悲しませるのは、どうかと思ふんです。初枝さんが手術で死んだも

のとあきらめて、捨てたつもりで、僕に下さいませんか。僕は初枝さんが僕を離れて、これからどうして生きて行くのか、想像も出来ないんです。決してまちがひは起しませんから、明日も今まで通り見舞に行かして下さい。僕等をもう暫く、黙つて見ててくれませんか。」

「はい。よく分かりました。」(九『女性開眼』266ページ)

19 「はあ。」

と、私は自分勝手な想像に耽りながら、ぼんやりしてると、

「電話ではしかたがありませんわ。決して御迷惑なお願ひをするつもりぢやないんですから、是非一度どうぞ。ただお目にかかりたいんです。」

それが美恵子からの初めての電話であつた。(二十一『見知らぬ姉』581ページ)

20 とにかく、さち子は父にたいしてばかりでなく、母や妹たちにも、やさしい娘に生ひ立つたのだが、まったくかたくな根があるらしかつた。たとへば、直木家へ出入りする占領軍のアメリカ人たちが、さち子を可愛い、可愛いと言つても、さち子はアメリカ人たちに親しんでゆくけはひがなかつた。言はれればきれいなきものを着て、客間の接待にも出るし、人形など手細工ものもくれるが、ただそれだけであつた。アメリカ人の家に招かれても、決して行きたがらなかつた。ふしぎであつた。(十七『たまゆら』561ページ)

21 「女の子を起こさうとなさらないで下さいませよ。どんなに起こさうとなさつても、決して目をさましませんから……。女の子は深く眠つてゐて、なんにも知らないんですわ。」と女はくりかえした。(十八『眠れる美女』136ページ)

さて、例15、16、17から一転して、例18では、相手に依頼する理由を述べるところに、「決して」が用いられ、その打ち消しの気持ちを一層強め、相手に訴えていることはそのはたらきと言えるだろう。この場合、「決して」が理由になる前項の事態にかかつて、それを取り立てることは特徴的に思われる。

それから、例20、21で用いられている「決して」にも表現主体の何かの意図を伺わせている。ここでまとめて説明すると、それは、つまり「決して」が相手に伝えたい、訴えたいところをわざわざ取り立てる役割を果たすことではなからうか。

三、ま と め

以上の考察から、川端康成の小説の実例のなかで、主に次のような特徴が見られると言えるだろう。まず、一つは、前の文に続いて、補足説明のようなものを加えられるところに「決して」が使われること。この場合、文と文との接続において、「しかし」「けれども」「が」などのいわゆる接続詞が特徴的に用いられる。それから「決して」がなにかの前提をふまえて使われること。もう一つは、前に述べたこと、相手が述べたことを一つにまとめ、「決して」でそれを取り立てること。この場合、「こと」「そんなこと」「それ」などといった語を特徴的に用いられる傾向がある。また、もう一つは、「なら」「と」「から」「ても」などのいわゆる助詞が用いられた文のなかで、「決して」が前項か後項かに使われ、「取り立て」という特徴が認められることである。そうしたところで何かをわざわざ取り立てるといふ表現主体の意図を伺わせていることなど、以上の特徴が取り上げられるだろう。このような特徴は、単語として意味・機能についての考察からはなかなか見えてこない。文あるいは文を越えた視点から見れば、はじめて浮かんでくるだろう。以上のような特徴をまとめて言えば、川端康成の個人的な表現の特徴もここで見えてきたのではないであろうか。

今回の考察で分類しきれないもの、割愛せざるを得ないものも数多くあるが、川端康成のこのような個人的な表現の特徴は他の小説家と比べてどう違うだろうか。これからの一つの課題として、比較対照を行なって究明していきたい。

注

- ① 永尾章曹・松浦純子『「全然」と『全く』について——陳述の副詞についての一考察——』（1996 安田女子大学国語国文論集第26号）

主な参考文献

- ①永尾章曹（1975）『国語表現法研究』三弥井書店
- ②田中敏生（1983）「否定述語・不確定述語の作用面と対象面——陳述副詞の呼応の内実を求めて——」『日本語学』2巻10号
- ③渡辺実（1983）『副用語の研究』明治書院
- ④宮崎和人（1990）「判断文における言表態度修飾成分とモダリティの呼応」『新居浜工業高等専門学校紀要（人文科学編）』第26巻
- ⑤中右実（1994）『認知意味論の原理』大修館書店
- ⑥北原保雄（1996）『表現文法の方法』大修館書店

討議要旨

山口博氏より、発表者が挙げられた「決して」の用例は、日常的用法ともとれ、どこが川端の個人的な表現であるか、そして他の作家と比較してみた場合どう違うのか、またその結果川端文学がどうなったのかということ述べると論旨が明快になるのではないかと指摘がなされたが、これについては今後の課題としたいという答えがあった。

安倍公房を研究しているM・メラノビッチ氏は、安倍の小説には「決して」という言葉よりも「しかし」が多いことを指摘され、「決して」は川端にとってなにか意味があったのかどうか、川端の文章の特徴を捉えたうえで検討してみると、「決して」の意味が浮かんでくるのではないかと述べられた。